

# 和漢聯句における天皇の付句考

— 後土御門天皇を中心に —

新 藤 宣 和

## 一 はじめに

和漢聯句とは、中国の聯句と日本の連歌が結合した連歌の一種である。五・七・五の長句或いは七・七の短句の和句と五言句の漢句を連ねる文芸であり、狭義には発句（一句目）が和句のものを和漢聯句、漢句のものを漢和連句と称する。連衆と呼ばれる作者達が一堂に会し、その場で句を考えて付ける。式目等は凡そ連歌に準じ、発句では貴人等による挨拶の句が詠まれ、脇句・入韻の句（二句目）で韻字が決され、以下の漢句では同韻の字を用い、基本的に和漢各半数ずつとされる。鎌倉時代に始まり、室町時代には五山の僧侶と堂上・武家・連歌師の交流のなかで盛行され、そこから和漢俳諧・和漢狂句なども派生したが、元禄

年間（一六八八—一七〇四）に衰退した。

さて、それらの期間を通じ、殊に和漢聯句を愛好したのが後土御門天皇（一四四二—一五〇〇、在位一四六四—一五〇〇）である。後土御門天皇は和歌にも通じた天皇であるが、崩御までの三三年間に一五〇〇回もの和漢聯句会を催す<sup>〔1〕</sup>など、和漢聯句に没頭すること甚だしかった。それと同時に、在位中に応仁文明の乱を経験し、朝廷の困窮と京都の壊滅に遭遇したことはよく知られている。和漢聯句という特異な文芸に専心した一方、大きな国難に遭遇した後土御門天皇は、果たして和漢聯句会という閉鎖的な場で如何なる振る舞いを見せたのであろうか。そこには天皇としての象徴的な姿勢や、当世に対する天皇の視座が見出されよう。こうした点から、本稿は後土御門天皇の主宰した和

漢聯句会における作品の表現に着目して考察を行うものである。

以下に天皇の和漢聯句、或いは後土御門天皇治世下の和漢聯句に関する先行研究を参照したい。朝倉尚は「連句連歌会の形態―『実隆公記』を中心に―」（『中世文芸叢書1 連歌とその周辺』広島中世文芸研究会、昭和四二年）にて、『実隆公記』の記録から、当時の和漢聯句においては言捨、口号、両座連句連歌、千句和漢聯句など新たな試みのなされていた事例を多く紹介した。

小森崇弘は『戦国期禁裏と公家社会の文化史―後土御門天皇期を中心に―』（小森崇弘著書刊行委員会、平成二二年）にて、後土御門天皇の和漢聯句会の人的構成を分析し、衰微する朝廷において、天皇主導の下、公家を再び朝廷に招集し、天皇と皇族・勸修寺流・内々番衆と共に「一座」をなすことで結束を固める意図があった点を指摘している。応仁文明の乱以前、天皇がこうして「一座」を共にすることは稀であったことに對し、後土御門天皇が積極的にそうした機会を有したのは、内々との結束の強めることで摂関・清華などの高位の公家を排し、天皇を中心とした朝廷運営の姿勢と、公家再編の意図を具現化するための行事であった点を考察、評価している。

小山順子は「後土御門天皇と連句文芸」（『室町文化の座標軸 遣明船時代の列島と文化』勉誠出版、令和三年一〇月）にて、現存する清書懷紙の修正や公家日記等から後土御門天皇自ら禁裏文芸を指導する姿勢を、父・後花園院との關係を踏まえて分析している。

これらの先行研究では、和漢聯句会に付随する試み、連衆、懷紙などが主な研究対象とされ、後土御門天皇の作品そのものに対する検討は乏しかった。そこで本稿ではこれまでの研究と異なり、和漢聯句における後土御門天皇の付句に對する表現分析を通じ、その特徴を明らかにしたうえで、一座における天皇の在り方を考察する。また、臣下との付合から、そこにどのような君臣關係が認められ、後土御門天皇と天皇を取り巻く連衆が如何なる場を所期していたのかも検討したい。これらの分析を通じて、中世における堂上和漢聯句の座が如何なるものであったか、その一端を明らかにしようとするものである。

## 二 和歌における天皇の為政者性

本節では、後土御門天皇による和漢聯句の付句を考察する前に、それ以前の長きに亘る天皇の和歌の伝統において、如何に天皇の為政者性が表現されてきたのかを参照す

る。以下に、和歌において權威・規範であつた勅撰和歌集から為政者性の読み取れる歌例をいくつか参照してみよう。

まず、民の貧しく辛い暮らしを思いやる御製の例を挙げ

a 夜を寒み寝屋の衾のさゆるにも藁屋の風を思ひこそやれ

(続後撰集・雑上・一〇九三・後鳥羽院)

b いたづらに安き我が身ぞはづかしき苦しむ民の心思へば

(玉葉集・雑五・二五三二・伏見院)

a は寒夜には宮殿の衾の中ですら冷たく、民の暮らす粗末な藁屋の風の寒さに思いを致す。自身の感じた寒さから、それよりも遥かに厳しい生活の只中にある民の寒さを思いやつた。

b は意味もなく安泰な暮らしを送る自身を恥じ、日々暮らしに苦しむ民の心を思えば、と民の心情を思いやり、それと同時に天皇という無条件に平穩な生活の保障される我が身を恥じる。また、そうした身位を「いたづらに」として、天皇としての責務を果たせない自身を恥じる心情を吐露しており、述懐的な表現も興味深い。

次に天皇が治世の安寧を祈る御製の例を挙げる。

c 世治まり民安かれと祈こそ我が身に尽きぬ思ひなりけ

れ

(続後拾遺集・雑中・一二四一・後醍醐天皇)  
d 今も猶民の竈の煙まで守りぞすらむ我が国のため

(新千載集・神祇・九三八・後宇多院)

c は世が平穩に治まり、民の暮らしが安らかであればと祈る心こそ、我が身に尽きない思いであるとして、率直に天皇としての祈りを詠う。平穩な治世と民の安寧は天皇として最も優先して祈るべき事項であろう。d は我が国のために、現在もお民の竈の煙まで見守ろうと詠む。古代の「高き屋に登りて見れば煙立つ民の竈はにぎはひにけり」(新古今集・賀・七〇七・仁徳天皇) 以来の伝統を受け継ぎ、「今も猶」民の豊かな暮らしを守り、祈つてゆくことこそが国の将来に繋がると詠う。

最後に乱世に際して、我が身の述懐を詠む御製の例を挙げる。

e 世を救ふ心の内のなほざりに民の憂へをなすぞ悲しき

(新千載集・雑中・二〇〇八・伏見院)

f 治まらぬ世のための身ぞ憂れはしき身のための世はさもあらばあれ

(風雅集・雑下・一八〇七・光嚴院)

e は世を救いたいとの自身の心の疎かさゆえ、民が日々の暮らしに憂えることを悲しむ。民がつましい暮らしの中で憂えているのは、自身の世の中を救いたいという祈りの心

が等閑であるゆえであると悔過を詠う。fは乱世の原因である我が身はなんと嘆かわしく、そんな私のための世などどんなものであろうとも構わない、と不安定な治世は自身の不徳によるものであり、そんな自身の生きる世に対して無頓着な姿勢を詠む。

fの「身のための世」という辞句は、光厳院の祖父・伏見院の歌に多く見られる。即ち、「神や知る世のためとてぞ身をも思ふ身のためにして世をば祈らず」(新拾遺集・神祇・一四三三)、「身のための世こそさてしもありうけれ世のための身は逃れにしかど」(伏見院御集・一一七二)などである。当該歌はこれらの表現を引き継ぎつつ、南北朝の動乱を自身の責任としている点が大きな特徴である。<sup>(3)</sup>御製において天皇の時事的内容を含む述懷性が表出する例として、後土御門天皇との関連が注目されよう。

これらに共通するのは、貧しい暮らしを送る民や乱れた世に対し、安泰な立場である我が身を恥じつつ憂い、太平な世を希求する為政者の姿勢である。そこには民の生活を送りやる儒教的価値観に根ざした理想的帝王像と共に、乱世を自らの責任によるものとする天皇の姿も見出される。こうした天皇の姿勢については第四節で考察したい。

### 三 連歌における天皇の為政者性

次に、連歌における為政者性の例を見てみよう。

まず、天皇として皇統への意識が表された御製の句を挙げる。

(にこりなき世も今こそぞ知れ)

g 石清水ひとつ流れにせきとめて

(菟玖波集・神祇・五六九・後崇光院(伏見宮貞成親王))  
濁りのない聖代はまさに今と知れとの前句に対し、濁りのない石清水の流れを一つになるよう堰き止めて、と詠み、鎌倉時代以来、分離してしまった皇統を、皇祖神を祀る石清水八幡宮の下に一つに統合することが濁りなき世の実現であると付けた。

次に、天皇として民の暮らしを思いやる付句の例を挙げる。

(早苗とるけふ御幸にぞなりける)

h 民のしわざは時もたがへず

(菟玖波集・賀・一八〇五・伏見院)  
民草が早苗を手取る今日に御幸されたとの前句に対し、農民の仕事は時期を違えないものだ、と詠み、実際に農村に御幸した体で勤勉な民の規則正しい職務を称賛する心情

を付けた。

(草も木も同じめぐみの時を得て)

i 野山の春も我が国の春 (菟玖波集・春上・七六・崇光院)

草も木も芽ぐむ時機を得ているとの前句に對し、民の譬喩である草木の茂る国の隅々の野山の春も、天皇の治める国の春なのだ、と付けた。

(君としてこそ人をあはれめ)

j いつはらぬ神の慮もひとつにて

(菟玖波集・賀・一八〇八・後光嚴院)

治天の君として人々を憐れみ、慈しまれるとの前句に對し、偽られることのない神の心も天皇である私と一つであるうとして、神々と自らは等しく民の人々を常に愛おしんでいるのであり、それと同時に民の安寧を神に祈る自身の姿勢を詠む。

連歌においても、天皇が国や民、世相に對する大局的視座、民の暮らしを思いやる理世撫民の精神が和歌から引き継がれていることが見出されよう。連歌においては、gやjのように次に付けるのが天皇であることを想定し、天皇やその治世を礼賛する前句が見られることも特徴であろう。こうした和歌・連歌の根底にある民・国を思いやる為政者像からは、仁徳天皇以来の伝統が和歌や連歌に脈々と

連なってきた系譜が見出せるのである。

#### 四 和漢聯句における後土御門天皇の付句

これまで和歌・連歌における天皇としての為政者性を考察の対象としてきた。さて、乱世に臨んだ後土御門天皇がそれらをどのように学んだのか。そうした天皇の在り方は如何に継承され、和漢聯句という新たな文芸のなかでどのように表出されたのか。そのような視座の下、複数の和漢聯句作品を考察したい。なお、句上<sup>(4)</sup>或いは作者表記が現存し、確実に後土御門天皇の句であることの立証される作品を検討の対象とした。

##### ① 文明一三年(一一四八)七月二日和漢百韻

当該百韻は下平声一先韻、和句は五一句、漢句は四九句である。発句は「名にたてと木毎にはみぬもみぢかな」(連衆不明)、挙句は「聖朝礼且千(聖朝の礼、かつ千たり)」(卜部兼致)である。

八 和日玉生煙(和日に玉、煙を生ず) (連衆不明)

九 民の戸もふりうづみぬる雪のうち (連衆不明)

一〇 のばれば風の寒きたかき屋 御製(後土御門天皇)

打越の句からの行様を踏まえつつ、以下に解釈する。李商隱の「錦瑟」や『搜神記』卷一六「紫玉」等に基いた

「和やかな日には玉より煙の生ずる」との打越（八句）に對し、前句（九句）では「煙の生ずべき」民の戸も、降り積もつて埋めてしまった雪の中」と付けた。「煙」と「民のかまど」が寄合となる。

後土御門天皇はこれに對して、「（民は雪の中で苦しい事だらう）登つてみれば風の寒いことだ、高い建物は」と付ける。雪が積もり、寒風の吹き荒ぶ中、粗末な家で過ぐす民の苦境を思いやり、その寒さを分かち合おうとする理想的帝王像を詠んでおり、第二節で見た和歌のような為政者意識がよく表れているといえよう。

なお、後土御門天皇の句「のほれば風の寒きたかき屋」に關しては、『文選』「風賦」の影響が指摘されよう。

楚襄王游<sub>二</sub>於蘭台之宮<sub>一</sub>、宋玉、景差侍。有<sub>二</sub>風颯然而至<sub>一</sub>、王迺披<sub>レ</sub>襟而当<sub>レ</sub>之曰、快哉此風。寡人所<sub>下</sub>与<sub>二</sub>庶人<sub>一</sub>共<sub>上</sub>者邪。宋玉對曰、此独大王之風耳、庶人安得而共<sub>レ</sub>之。

「風賦」は、帝王と庶民には異なる風が吹くとして、問答を通じて王の贅沢な生活を非難し、庶民の生活の悲惨さを訴える内容である。右は冒頭部分で楚の襄王が宋玉を伴つて蘭台の宮に遊んでその風の心地よさを感じ、これは自身と庶民が共有するものと宋玉に問うと、これは庶民と共

有されることがない、王にのみ独占されるものと答える箇所である。後土御門天皇は「風賦」から状況のみ抽出し、民の寒さと天皇自身の感ずる寒さを同一視し、苦しみを共有する内容へ逆転させた。

『文選』そのものは上代以来日本文学に多大な影響を与え、「風賦」同様、楚の襄王と宋玉が對話する「高唐賦」は中世以降多くの和歌の題材とされたが、仙女との恋愛を描いた「高唐賦」に比べて政治的色彩の強い「風賦」が和歌の題材とされた例は乏しい。

また、高所から天皇が国を見渡し、民の暮らしを思いやる姿勢は、先にも挙げた仁徳天皇詠に始まる国見する天皇像の影響が挙げられよう。また、『大鏡』一「太政大臣道長」には醍醐天皇の事績として以下の説話が語られる。

同じ帝と申せど、その御時に生まれあひてさぶらひけるは、あやしの民の竈まで、やむごとなくこそ。大小寒のころほひ、いみじう雪降り冴えたる夜は、「諸国の民百姓いかに寒からむ」とて、御衣をこそ、夜の御殿より投げ出だしおはしましければ、おのれまでも、恵みあはれびられたてまつりてはべる身と、面立たしくこそは。

雪の降る晩、民の寒さを思い、暖衣を打ち捨てた醍醐天皇

の振る舞いも、まさにこうした伝統に連なるものといえよう。ここでは民の暮らしをただ思いやるだけでなく、恵まれた自身の状況を打ち捨て、その辛さを実際に体感することとで、より深く民の苦境に思いを致す点に重点が置かれる。後土御門天皇の句もこのような伝統に連なるものであったろう。

なお、「寒からし民の藁屋を思ふには衾のうちの我もはづかし」（風雅集・冬歌・八八〇・光厳院）のように、後土御門天皇と近い時代にも醍醐天皇の事績を踏まえた御製が見られ、この故事が室町時代の天皇にも名君の振る舞いと認知されていたと判断される。

後土御門天皇はこうした政治的要素を和句で表現しているが、後土御門天皇から約一世紀後の後陽成天皇は、晩年の和漢聯句活動にて「潔癖なまで」「和漢」にこだわり、漢句において「好んで政治的素材を詠み続けた」<sup>⑦</sup>点が先行研究で指摘されている。後土御門天皇が和漢聯句で政治性・為政者性を表出するに際し、こうした和漢の区別はあまり意識されておらず、むしろその融通無碍な点を賞翫していたようにすら思われる。

当代は身分と作品の表現が密接に結びついていた時期であり、天皇自身の思いに加え、こうした時代的背景もあつ

て先のような付句がなされたかと想像される。即ち、天皇は百韻のなかで天皇としての自覚を有して句を付け、時に為政者性が表現に現れたのではないかということである。更に注目すべきは、後土御門天皇が仁徳天皇以来の伝統的帝王像に連なりつつ、和句において『文選』等の漢的文脈を用いて詠んだ点であろう。内容こそ伝統を踏まえたものながら、和漢聯句という和漢の古典の混淆する複雑な文芸的遊戯の場を生かし、手法・出典を新たなものとしたことは極めて興味深い。

## ② 文明一四年（一四八二）四月五日和漢百韻

当該百韻は下平声一先韻、和句漢句各五〇句である。発句は「染なすやよもの山あゐ夏こ立」（西園寺実遠）であり、挙句は「恩喚豈遺賢」（徳大寺実淳）である。

九七 愚苦学難進（愚、学びて苦しむに進み難し）

勸修寺大納言（教秀）

九八 勤思功可全（勤めて功を思い、全かるべし）

太政大臣（久我通博）

九九 誰もみなめぐみある代やしたふらん

（後土御門天皇）

まず、打越からの行様を踏まえて解釈する。打越（九七句）にて教秀が「愚かなので学ぶにも苦心し、進歩し難い」

に對し、通博が「（愚かであろうとも）勤め苦心して志を全

うすべきだ」との前句（九八句）を付けた。天皇はこれに「（天皇として苦心すれば）誰であつても皆、恩恵のある代を慕うのだろうか」と付け、打越から前句までの勉強に励む作中主体は無力さを嘆く天皇自身へと転じた。

以下に、後土御門天皇の句「誰もみなめぐみある代やしたふらん」について検討する。まず、「誰もみな」については、以下のような和歌の用例がある。

・誰もみな留まるべきにはあらねども後るるほどは猶ぞかなしき  
（千載集・哀傷・五五九・長家）

・誰もみな花の都に散り果ててひとりしぐるる秋の山里  
（新古今集・哀傷・七六四・顯輔）

「誰もみな」は「何人も死からは逃れられない」という意で哀傷歌にしばしば用いられ、悲哀や寂寥感を導く。ここからは天皇が述懐の意を詠もうとする姿勢が窺われよう。

次に、「めぐみある代」の和歌の用例は以下の通りである。

・なれのみやつれなかるべき時鳥人をばわかぬ恵みある代に  
（文保百首・一一一九・実教）

・位山いま一入と松の色に恵みある世の春をしぞ思ふ

（雪玉集・六四〇）

前者は恵みある代ゆえに時鳥だけが自らを訪うことを詠み、後者が恵みある世の新春に官位を賜ったことを位山の松として詠む。これらに鑑みるに、「めぐみある代」は政治的な祝賀の意を示すものであり、当代への賛辞となる。片や、後土御門天皇は自身がそうした治世をもたせられなかったことへの悲嘆を込め、祝意を反転させているのは興味深い事象である。これと並んで、以下のように後土御門天皇が「めぐみある代」、即ち聖代への敬慕を示す句も存在する。

（功洪勒石名

勘解由小路高清）

・いにしへをしたふ心は朽せめや

（文明一五年六月七日和漢百韻・六七・後土御門天皇）

（秋の野に萩をみなへし開みちて

冷泉為広）

・世只憶嵯峨「世はただ嵯峨を憶ふ」

（文明一五年八月二五日和漢百韻・一八・同）

前者は「いにしへ」、即ち古の聖代を慕う心を詠む。後者は「世の人々は秋の虫の名所である嵯峨を思う」との意と、「世の人々、或いは私はひたすらに嵯峨天皇の尊い事績を追憶する」という意を掛けて詠む。類例を見ない詠みぶりであるが、ここでは「世」として主体に一般性があり、

時にはその支配者である天皇をも指す点、次に「只」（ひたすらに）という強意表現が用いられる点、更には「憶」として、「思」「想」「惟」とは異なり、過去の事象を記憶しては思い返す意を含んでいる点<sup>(8)</sup>なども、後者の解釈が妥当であることの証左であろう。これら「世」「只」「憶」はいずれも韻字ではなく、あくまでも句意を構築するものとして詠まれたと考えられる。

これらを踏まえて天皇の九九句を顧みるに、一〇年にわたって続き、京都を焼亡せしめた応仁文明の乱の終結・文明九年（一四七七）から五年弱を経た当世、民に恩恵を与えられない天皇自身への自戒や罪悪感、不甲斐なさへの悲嘆が見出せる。そうした感情が後土御門天皇の意識の底流にあったであろうことは①の民の苦境を思いやる付句からも看取されよう。前句までの蛭雪の故事を思わせる伝統的學生像から、天皇が付ける段階で、和歌の表現を踏まえて文学的に和らげつつ、現実の状況と為政者性が表現されることとなった。

これらに対し、あくまでも行様から導かれた文学上の一表現、民を思う名君の演技とする解釈は否定しない。しかし、後土御門天皇は自身の付句において、一般的な民心を慰撫する伝統的天皇像を超えた時事的な述懐性を見せる。

こうした現実の事象を強く反映する天皇の深い述懐は、晴れの場での公的な和歌では達成し難いのではないか。それを可能としたのは、和漢聯句という緊密な君臣関係の下に成り立つ閉鎖的な場であったのだろう。

### ③ 文明一五年（一四八三）八月一五日和漢百韻

当該百韻は下平声五歌韻、和句は四八句、漢句は五二句である。発句は「くもらでや月はみつしほ空の海」（後土御門天皇）、挙句は「同文漢与倭」（勸修寺経茂）である。

九三 もの、ふのたけき心もみちなれや（後土御門天皇）

九四 代已簋干戈（代、已に干戈を簋す）

侍従中納言（三条西実隆）

九五 呼雀太平闕（雀を呼ぶ太平の闕）（後土御門天皇）

はじめに打越からの行様を解釈する。「武士の勇猛な心も道であろう」との後土御門天皇の打越（九三句）に、実隆が「（武士の心も道であろうが）世の中はすでに武器を箱に収めた」と付け、すでに戦乱が終結し、武士は不要な世相を示した。張行当時は応仁文明の乱終結から六年を経ている。これに対し、再び天皇が「（世の中はすでに武器を必要とせず）雀を呼び込む程に太平な宮殿の門である」と付け、戦乱の終結を詠んだ。そこには大局的に世相を眺望する姿勢と、長く希求していた平和な世を寿ぎ、一〇年に亘

る室町第での避難生活を終え、あるべき御所に還幸したことの安堵などの心情が看取されよう。

当該句には「雀」と「太平」という特徴的な語がみられるが、これに関しては後土御門天皇と同時代を生きた、室町時代の禅僧である万里集九の詩集『梅花無尽蔵』第四・頌に「太平雀」の語が見られる。

太平雀于時台駕惠林院殿降<sup>二</sup>相国方丈<sup>一</sup>。觀<sup>二</sup>一堂頌<sup>一</sup>。  
余始入<sup>レ</sup>社。横川桃原為<sup>二</sup>同年<sup>一</sup>。贅短三年不<sup>レ</sup>得鳴<sup>一</sup>。  
今朝九万試<sup>二</sup>鵬程<sup>一</sup>。此声一々非<sup>二</sup>凡鳥<sup>一</sup>。天上亦驚天  
下驚。

友人らと共に詩社に入って数年の研鑽の末、ついに自らの詩を発表することとなった。その詩は人々を驚かせる出来栄えに違いないと自負する内容である。万里集九は「太平雀」を「太平の代に生きる、ひ弱で未熟な雀（のような私）」との意で用いている。そこには鷹鷲や鴻鵠に臆することなく、小さくひ弱な雀でも穏やかに文化的営為に参画出来るほど、現在は戦乱などのない太平の世であるという寿きも含んだものであろう。

また、いずれが先行する用例かは定かでないものの、万里集九とも交流のあった禅僧・横川景三の『蘿蔔集（梅谿集）』にも「太平雀」の語が見られる。

賀遷居 某少年時從師寓此寺<sup>山イ</sup>等持  
円通閣聽<sup>二</sup>百囀鶯<sup>一</sup>。万年枝鳴<sup>二</sup>太平雀<sup>一</sup>。

ここでは雀に未熟さ、ひ弱さという意味合いはなく、「百囀鶯」と対句で用いられている点からも解る通り、あくまでも太平の世の長閑な豊かさ、賑やかさの表象に重点が置かれていると考えられる。また、「太平雀」という語はこの時代以前、中国の漢詩文における使用例がなく、五山文学を担った日本の禅僧らによる詩文のなかで生まれた語と推測されよう。後土御門天皇が同時代の禅僧によって創出された表現にも注目・摂取し、これを自身の和漢聯句会において実際に用いているのだとすれば、大変興味深いと言える。

また、この句には「雀」と「闕」が詠み合わされるが、宮城の異称「鳳闕」に対し、衰微してしまった自身の朝廷を「雀を呼ぶ闕」と謙遜しつつ、「鳳闕」との間に俳諧的対比を見せる。更に、万里集九らの「太平雀」の用例からは、文芸を愛好する臣下を雀と擬え、和漢聯句会に集まる連衆を喩えたものとの読みも可能であろう。

さて、これまで第二節から本節まで後土御門天皇の付句の表現分析を通じて、その為政者性を分析した。先述の通り、先行研究では会の形式や連衆、懷紙等の情報からも後

土御門天皇の和漢聯句に臨む姿勢・意図が考察されてきた。本論文では後土御門天皇の和漢聯句の表現を調査することで、為政者性・政治性は、それまで連綿と続いてきた和歌・連歌における理想的帝王像の伝統を念頭に、漢詩文の文脈も取り込みながら表現されていたことを見出す。これは和漢聯句という文芸の特性を生かした付句と言える。

その背景の一つには、天皇が若年より清原業忠の儒典講義を受けてきたこともあろう。「世歌堯与舜（世は堯と舜を歌ふ）」、「孔門誰不訪（孔門、誰か訪はざらん）」（文明一四年四月二二日和漢百韻・四五／六五・後土御門天皇）という付句からも解る通り、後土御門天皇の和漢聯句には儒教思想も存分に受容・反映されている。これらの句は「不徳」、「天命」など天皇の儒教思想の表れと考えられる。また、漢詩文由来の表現を用いることで、政治性・為政者意識を一層直接的に表現することが可能となった点にも注目されよう。

もう一つの重要な背景として、京都の大半を焦土と化し、多くの人命が失われた未曾有の戦乱、応仁文明の乱がある。天皇の句からは乱に直面したことに起因する罪悪感や悲嘆、その終結への安堵感も読み取れる。自身が天皇として当時の乱世を統御出来ず、ついには朝廷を衰微させたことへの悔悟・慙愧が、文学的に和らげながらも表現さ

れている。即ち、後土御門天皇の表現における特徴とは、内密な場で時事性を含む述懐の心を詠む点であろう。そうした天皇の時事的な述懐性は、和漢聯句という和漢双方の文芸に立脚し、天皇が臣下と直接句を付け交わす私的な場が可能とするものであった。

## 五 天皇と他の連衆との関係

これまで後土御門天皇の句には民を思いやる和歌的帝王像の伝統に連なること、和漢の典拠を踏まえつつ応仁文明の乱などの現実社会の事象が反映されていることを述べた。本節では和漢聯句の一座において、天皇と他の連衆の間でどのような付合がなされているかを考察する。ここでは厩大な付合の中でも、殊に天皇が他の連衆からどのような眼差しを向けられていたかが読み取れる例を分析したい。

### ④ 文明一一年八月一四日和漢百韻

当該百韻は下平声十一尤韻、和句は四二句で、漢句は五八句と少々漢句偏重の感がある。発句は「今みるもあすの光の月夜かな」（後土御門天皇）であり、挙句は「春遊連句脩（春遊に連句を脩む）」（源富仲）である。なお、句頭に引かれた斜線は合点を示す。

七九 倚欄心緒乱〔欄に倚りて心緒乱る〕

勸修寺大納言〔教秀〕

八〇 排戸眼塵哀〔戸を排せば眼塵を哀む〕

元修

八一 撐月生孫竹〔月を撐して孫竹生ず〕〔後土御門天皇

八二 期秋結子榴〔秋を期して子榴結す〕

新宰相中將〔実隆<sup>(1)</sup>〕

はじめに、七九句から八二句への行様を解釈する。「高欄によりかかっていると、考えも乱れる」とする教秀の打越（七九句）に対し、元修は白居易「感春」を踏まえて、「戸を開ければ、眼には俗欲が集まる」と付けた。これに対し、天皇は「〔眼に塵の集まらぬように〕 月を漕げば、竹の子孫が生えてゆく」と付け、前句の内容も受けつつ、皇室の繁栄を祈願する句を付けている。天皇の句を受けた実隆は「秋ともなれば柘榴が実を結ぶ」と続いて付け、重ねて一層の栄華を願うこととなった。

ここでは後土御門天皇だけではなく、他の連衆の句にも語釈を施しつつ、天皇の句への行様と天皇の句を受けての付句を確認してゆく。教秀の七九句「倚欄心緒乱」については、釈徳洪の「遠浦帰帆」における「倚欄心緒風糸乱 蒼茫初見疑『鳧鴈』」（石門文字禪<sup>(2)</sup>）と表現の大部分が重複しており、これに基づく表現と見て間違いないであろう。

次に元修の八〇句だが、「眼塵」については、白居易の「感春<sup>(3)</sup>」では「憂喜皆心火 栄枯是眼塵」とある。眼塵は心を汚し、煩惱を起こさせる知覚対象という「六塵」の一であり、句意としては「栄枯盛衰の流れも眼に映つては、心を掻き乱す俗欲のようになくならない」となる。

これに続く後土御門天皇の八一句を分析する。「撐月」は、李賀の「宿日觀東房詩」における「古木愁<sup>(4)</sup>」作「撐月」危峰欲墮江<sup>(5)</sup>との用例があり、「古木は月に棹差して愁う」との意で詠まれている。「月」「生（孫）竹」という表現は、白居易の「七言十二句、贈駕部吳郎中七兄<sup>(6)</sup>」時早夏明燭閉窗<sup>(7)</sup>における「風生竹夜窓間臥 月照松時台上行<sup>(8)</sup>」との句を典拠とする。後土御門天皇がここで「竹」を詠んだのは、『史記正義』梁孝王世家において「〔於是、孝王築東苑、方三百余里〕 俗人言梁孝王竹園也<sup>(9)</sup>」とあるように、竹園が天子の子孫、皇室の血統を指す語であることに拠るからであろう。即ち、「孫竹」とは皇統に属する子女のことであり、筍は健やかな児童の子孫の成長の象徴であり、皇孫が多く生まれ、繁栄するさまが詠まれていると解されよう。

実隆の八二句「期秋結子榴」は、元稹の「有酒十章其六」における「紅豔猶存『榴樹花』 紫苞欲綻高筍牙 筍

牙成竹冒<sup>二</sup>霜雪<sup>一</sup> 榴花落地還<sup>二</sup>銷歇<sup>一</sup>との句を典拠とし

て、竹を詠む前句に付けられたものである。石榴は紀元前二世紀に張騫が西域から中国に持ち帰ったとされ、実と種が多いことなどから古くより吉祥紋様として図案化され、筍同様、子孫繁栄の象徴として喜ばれた。より直接的な表現の典拠としては、劉基の「丙申歲十月還鄉作七首其四」中の「手種庭前安石榴 開花結子到<sup>二</sup>深秋<sup>一</sup> 可<sup>レ</sup>憐枝葉從<sup>レ</sup>人折 尚有<sup>二</sup>根株<sup>一</sup>為<sup>二</sup>客留<sup>一</sup>」<sup>18)</sup>が挙げられよう。

以上を踏まえると、後土御門天皇の衰微した王朝に再び繁栄をもたらしたいとの願いに対し、実隆が天皇と同様、漢詩文の文脈を踏まえつつ、天皇に続いて同じことを願って繁栄を寿ぎ、天皇と臣下の思いが変わらないことを表現していることがわかる。

⑤ 文明一四年（一四八二）四月五日和漢百韻

作品の概要に関しては、第四節②を参照されたい。

二三 雪飛蓑背重〔雪飛びて蓑の背重し〕

関白（近衛政家）

二四 路滑杖頭円〔路滑る杖頭円し〕

内大臣（西園寺実遠）

二五 分のぼる人や苦しき鳩のみね

二六 仕へてぞみのうさもわする、

（後土御門天皇）  
中院一位（通秀）

二七 宴闌斟聖処〔宴闌にして聖処にて斟む〕

海住山大納言（勘解由小路高清）

まず、全体の流れを概括する。「吹雪が飛び交い、蓑を負う背が重い」という柳宗元の「江雪」を思わせる政家の打越（二三句）に対し、実遠が「（雪の積もる）路を滑る杖頭は丸い」と俳諧的気風を漂わせる句を付けた。「円」は押韻に依るもので、実質的な意味は有さないのである。これに対し、天皇は「（杖をつきながら）分け登ってゆく人は苦しいことだろう、鳩の峰を」と付けた。通秀はこれに続いて、「（たとえ山路が苦しかろうとも）お仕えしていれば、身の憂さも忘れられる」と付ける。この通秀の句に対し、高清は「（お仕えしていると体の疲れも忘れる）宴はたけなわであり、聖処で酒を酌み交わすのだ」と付けた。

以下に天皇の句までの行様とその続きを見る。天皇の前句である実遠の二四句「路滑杖頭円」については、白居易「三諠 其三 朱藤諠」における「朱藤朱藤。温如<sup>二</sup>紅玉<sup>一</sup>、直如<sup>二</sup>朱繩<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>我得<sup>レ</sup>爾<sup>一</sup>以為<sup>二</sup>杖<sup>一</sup>、大有<sup>二</sup>裨<sup>一</sup>於股肱」<sup>19)</sup>（中略）泥粘雪滑、足力不堪が典拠として挙げられよう。打越における雪のなか蓑を負ってゆく様から、雪の降るなか杖を突いてゆく光景に転ずる際に当該作品を踏まえたものであろう。

次に、後土御門天皇の二五句は男山の異称である「鳩のみね」を詠む。その頂上には石清水八幡宮が鎮座することは著名であり、「鳩のみね」も八幡神の神使が鳩であることとに拠る名である。八幡神は応神天皇の霊とも習合したことで皇祖神として位置付けられ、歴代天皇・上皇等によって度々石清水八幡宮への行幸啓がなされている。

なお、杖と鳩は寄合である。<sup>20</sup>鳩と杖に関しては、『後漢書 三国志』礼儀志中において「八十九十、礼<sup>21</sup>有加賜<sup>22</sup>」。王杖長尺、端以鳩鳥為<sup>レ</sup>飾。鳩者、不噎之鳥也。欲<sup>23</sup>老人不<sup>レ</sup>噎<sup>24</sup>」とあるように、鳩は噎せないことから、鳩の飾りを冠した杖を皇帝から老臣に贈る風習が見られ、寄合もこれに拠るものであろう。日本の朝廷でも取り入れられ、天皇とも深い関係がある。なお、男山と鳩と杖を詠み合わせた例に以下の和歌がある。

・八幡山神やきりけん鳩の杖老いて坂行く道のためとて

(新後拾遺集・神祇・一五〇八・家長)

・男山老の坂行く人は皆鳩の杖にもかかりぬるかな

(夫木和歌抄・雑九・二二八四三・家長)

前者は「男山から八幡神が伐った鳩の杖である、老いても坂道を登るために」、後者は「男山の老の坂を行く人は皆鳩の杖に寄りかかっている」との意で、老いて賜った鳩杖

を突きながら鳩の峰を登る例が多い。後土御門天皇の句の場合でも、杖が滑り転がるほどに険しい山路を登る苦しさに加え、寄合から老いも苦しさの理由の一つとして窺わせる。

続く通秀の二六句は、「うさ」に注目すると、「世の中のうさ」には神のなきものを何祈るらむ心づくしに」(平家物語・卷八・緒環<sup>25</sup>)などの歌に見られるように、「憂さ」と「宇佐」を掛けるものだろう。この「宇佐」は石清水八幡宮と並ぶ八幡信仰の総本社である宇佐八幡宮を表すものであり、八幡信仰に基づく付合である。

最後に高清の二七句であるが、末尾の「聖処」に関して、「学仙行為急 奉<sup>レ</sup>戒制<sup>26</sup>情心<sup>27</sup> 虚夷正氣居 仙聖<sup>28</sup>処相尋<sup>29</sup>」(佚名「三徒五苦辞其七」)といった例のように神仙思想と結び付いて用いられる例がある。即ち、上皇の居所である「仙洞」などと同様、皇室の居所、宮殿・御所を雅語的に言い換えて指したものと推測されよう。

これまでの全体の流れを見るに、通秀は天皇の句に対し、天皇にお仕えしていれば、男山を登る程の苦勞すら忘れられる、と付け、高清はこれに身の疲れを忘れるのは、禁裏の宴で酒を汲む時だと付けた。

この事例では二六・二七句が天皇の句を読み替え、輔弼

して場を祝福するなかで、天皇の治天の君としての為政者性が活写される。発端である天皇の句には「鳩のみね」という天皇と所縁ある辞句が見られるものの、老いの述懐が主であつて、為政者性を感じさせる句とは言ひ難い。その一方で、臣下が自発的に祝意を重ね、それをより広く、強いものに変化させた点に着目されよう。その際に漢的素材を用いることで、政治的意味合いも保証された。そうした和漢の文学知識の求められる場に自らが属していることは、社会的優位性を連衆に感じさせ、天皇と共有する一座における結束を固めることとなつたと思われる。

固より和漢聯句会という密接な人間関係の下に開かれ、出勝<sup>23</sup>で卷かれる連歌・聯句会は、当時の和歌会の出詠と異なり、当座に同席していないと成立しない。こうした作者の明確な場において、作者と作品を繋ぐ回路は強固なものであろう。

更に本節で注目すべきは、臣下によつて天皇の為政者性が描写される過程の如何である。天皇自身の句に対して、時にその内容に則して同じ内容を連ねて増幅する場合もあり、時に元の内容に政治的意味合いが希薄であらうとも、そこから祝意性を導く場合も見られる。そこには天皇に導かれ、輔弼・祝福する臣下の像が示される。そうした君臣

による共働性を実現する場として、和漢聯句という文芸が機能していたのであろう。

## 六 臣下の付句における政治性

これまで後土御門天皇の付句と後土御門天皇と臣下の付句を分析してきた。本節では天皇の付句とは直接関わらない、臣下のみによる政治性を帯びた付句を参照し、その特徴を分析する。政治的内容、国家や天皇を暗示する内容を含む句を付けるのが必ずしも天皇に限った事象ではないことを示しつつ、臣下の句と比較することで、後土御門天皇の付句における為政者性の特徴を相対化する。

以下に、臣下の付句において、政治性の強い題材を詠む付句を三例示す。

（山川のすゑはひろくやながるらん 実隆）

A ゆたかにみゆる民のつくり

（文明一四年四月二日和漢百韻・四四・通秀）

（草葉までおさまる時になびくらん 勝仁親王）

B 五風至四方（五風、四方に至る）（同百韻・一〇〇・実隆）

（おろかなる身をは心やうらみまし 冷泉政為）

C 聖代祝遐齡（聖代、遐齡を祝す）

（長享元年閏一二月七日和漢百韻・一〇〇・政家）

まず、Aの通秀の句は「山川の末流は大きく広がって流れてゆくことであろう。そうした川の下流域では」、豊かに見える、民の耕す田であるよ」と付けている。実隆の前句の時点で早くも自然の景に擬えて皇室と民の繁栄が暗示されているようにも思われる。更に、通秀は山川から田という里の光景に転じ、豊穡な田とこれを耕す民の営みを寿ぐ。

次に、Bの実隆の句は「(心のない草葉、そして民草の末々までも治まるべき時であるのは、天皇に従っているからであらう)、太平な世に吹くという五日に一度吹く風が、天下の四方に行き届き、平穏な治世となろう」と付ける。無情の草木と民草を掛けた「草葉」までも天皇に従うとの実隆の前句に対し、「なびく」の語から太平の世の瑞祥である五風を導き、これが天下四方に至るとして、重ねて太平の世の到来を祝う内容となっている。

最後の例であるCの政家の句は、「愚かにも意のままにない身を心は恨んでいることであろう」、優れた天子の治めるめでたい代に、生き永らえた長寿を祝うのである」と付けている。ここでは老いてままならない身を嘆く前句から、そこまで生き永らえたことで、今上天皇の聖代に巡り合えたことを喜び、感謝する内容であった。

これらの例からも、臣下の句は後土御門天皇のように現

実の政治・社会情勢を背景として表現することはない。また、乱れた治世を自身の不徳を原因とする述懐もなく、当代の在り方を喜びこそすれ、否定的に捉える視点は有していないことが判る。

## 七 まとめ

後土御門天皇の和漢聯句における付句を中心に、それ以前の前天皇の和歌・連歌や臣下の句との比較、臣下との付合を検討した。その結果、後土御門天皇の和漢聯句における為政者性には、一〇年以上に亘る応仁文明の乱が大きな影響を与えたと考えられ、時事的な社会情勢を踏まえた述懐の存することを明らかにした。

後土御門天皇の和漢聯句会では、ときに天皇の句に対し、臣下の連衆によって皇室の繁栄への祈願、聖代への祝賀を詠む句が付けられた。天皇の句を発端としつつも、当座の共通理解を以て更に大きな祝意・称賛に導かれてゆく。なお、臣下は天皇の治世を寿ぐのみで述懐することはない。むしろ祝意によって天皇の述懐を緩やかに否定し、緊密な君臣関係を構築する。そうした場であればこそ、天皇による時事的述懐が可能であったのだらう。

後土御門天皇は和歌・連歌における日本文学史上の理想

的帝王像を継承しながらも、応仁文明の乱に象徴される世の乱れを自らの責とし、現実の世相を句の表現に反映している。そうした天皇の愁嘆は和漢聯句会という場の閉鎖性、君臣の親密さに支えられたものにほかならない。そのなかで詠まれる、自らの責任や不徳を表現した天皇の在り方は日本文学史上でも珍しく、注目すべきであろう。漢籍を典拠とすることで社会的な表現が容易となったこともあり、後土御門天皇の治世下における和漢聯句は、約四世紀に亘る表現史の中でも特に為政者性や君臣関係の際立つ文芸となった。

\*和漢聯句本文は断りのない限り京都大学国文学研究室中国文学研究室編『室町前期 和漢聯句作品集成』（臨川書店、平成二〇年）、和歌は『新編国歌大観』、『菟玖波集』は福井久蔵校注『日本古典全書 菟玖波集上・下』（昭和四七年、朝日新聞社）、漢籍は『新釈漢文大系』に拠った。なお、引用する際に用字、表記、句読点等を任意に改め、補った箇所がある。

（附記）本論は令和五年四月二九日の東京大学国語国文学会大会の発表を基にしたものである。研究発表に際して、多くの貴重な御質問・御意見を賜った諸

先生方には深く感謝申し上げます。

## 【注】

- （１）小森崇弘『戦国期禁裏と公家社会の文化史…後土御門天皇期を中心に』（小森崇弘君著書刊行委員会、平成二二年）。
- （２）岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』下（笠間書院、平成一六年）。
- （３）岩佐は光厳院を「自らの地位に対して明白に責任を取る事を、身をもって実現した」と評する（岩佐美代子『光厳院御集全注釈』風間書房、平成二二年）。
- （４）作者である連衆とその付けた句数の一覧。
- （５）『連珠合璧集』（重松裕之・木藤才蔵『中世の文学 連歌論集（一）』所収。三弥井書店、昭和四七年）。
- （６）『新編日本古典文学全集34 大鏡』（小学館、平成八年）。
- （７）『後陽成院の和漢聯句と聯句』（『国語国文』八六・五、平成二九年五月）。
- （８）『大漢和辞典』四卷（大修館書店、平成元年）を参考とした。
- （９）市木武雄は「太平雀」を「天下太平の時代の雀。雀は、万里たちが、まだ未熟な年頃をたとえたもの。」と注し（『梅花無尽蔵注釈2』八木書店、平成五年）、中川徳之助は「わたくしは、鳥で言えばまだ雛鳥のように」と解している

(9)『人物叢書 万里集九』吉川弘文館、平成九年)。いずれの  
解釈においても「太平」の部分に明瞭な解釈が与えられて  
おらず、「太平雀」に世間知らず、未熟さ、幼稚性と解され  
ている。しかしながら、これらの解釈は詩の後半部を参照  
した結果に拠るもので、不適當と言わざるを得ない。

(10)『続群書類従所収』第十二輯文筆部。

(11)『実隆公記』では同年八月の記事が欠損しているため確証は  
ないが、実隆が前年参議(宰相)に任ぜられていること、  
他の和漢聯句会にも多く参加している点などから、八二句  
の作者を実隆と推定した。

(12)四庫全書所収。

(13)『白氏文集』卷一八所収。

(14)全唐詩、四庫全書所収。

(15)『白氏文集』卷一九所収。

(16)四庫全書所収。

(17)全唐詩、四庫全書所収。

(18)誠意伯文集、四庫全書所収。

(19)『日本歴史地名大系』を参考とした。

(20)注1前掲書を参照。

(21)中華書局、平成九年。

(22)『新編日本古典文学全集46 平家物語(2)』(小学館、平成  
六年)。

(23)陸修静『太上洞玄靈宝授度儀』。

(24)連歌や俳諧連句の座で、順不同に句の出来た者から付ける  
ことをいう。出合とも。